

〔巻頭言〕

20巻を迎えた本学紀要の特徴と今後のあり方

紀要編集委員長 山田 洋子

岐阜県立看護大学は、看護学の高等教育機関として岐阜県の看護の質の向上に寄与することを使命として平成12年に開学し、本年度、開学20周年を迎えた。本学の紀要は、開学初年度の平成13年3月に第1巻が発刊されてから年に1回ずつ発刊され、第6巻から第10巻までは年に2回、第11巻からは再び年1回となり、本巻（20巻1号）までに全25号が発行されることになる。加えて本年9月には第20巻特別号も発刊した。これまでに掲載された論文総数は337編で、論文の種類別でみると、総説5編、原著42編、報告（研究報告・教育実践研究報告）185編、資料86編、その他19編である。

平成22年度より10年間、紀要の編集に携わってきたが、今回20年分の紀要を振り返り、大学創設からの数年は教育実践に関する研究報告が多く発表されていたことがあらためてわかった。第3巻から第10巻までは論文種類として「教育実践研究報告」があり、合計51編が発表されている。それ以外の論文種類において確認できる教育実践に関する研究報告は計30編あった。すなわち全337編のうち81編24.0%が教育実践に関する研究報告であった。近年、教育実践に関する研究報告は少なくなっているが、大学草創期には、本学の教育理念に基づいた特色ある教育方法の創出に、紀要が重要な役割を果たしてきたと言える。今後は、社会の様々な変化にあわせて教育も変えていく必要があり、そのためにはこれまでの自身の教育実践を振り返って評価し、時代に即した教育方法の開発が必要になる。将来に向けて本学の学士課程教育、大学院教育を充実させるために、紀要の活用可能性があると考える。

紀要の投稿規定は、この20年間に数回改正されているが、大きな変更点の一つとして、第13巻から投稿資格に本学大学院修了者を加えたことがある。これ以降、本学大学院博士前期課程の修士論文として取り組まれた看護実践研究を掲載できるようになった。近年は博士論文として取り組まれる看護実践研究の成果も投稿されている。修士論文、博士論文をあわせた看護実践研究は、第20巻1号までに、原著23編、研究報告12編、資料3編が発表されており、本学が開学以来、看護実践の改善・改革を

目指して取り組んでいる看護実践研究の知の集積が促進されていると言える。

大学院で取り組む看護実践研究は、実態把握に基づく課題の明確化、課題解決のための看護実践方法の考案・実施、取組の評価というプロセスをふみ、複数の研究方法を組み合わせて行うため複雑でありデータも膨大になる。その取り組みを研究論文としてまとめることは容易ではない。これまでに掲載に至らなかった論文も複数ある。看護実践研究の論文文化については紀要編集委員会で検討を重ねてきているが、課題は残されている。

平成30年9月に看護実践研究学会が設立した。本学会は、岐阜県看護実践研究交流会を前身とし、看護実践の改善・改革に寄与する看護実践研究の知の体系化と会員相互の交流による看護実践研究の推進・発展を図ることを目的としている。今後、学会誌を発刊する予定であり、看護実践研究の公表の場が加わることになる。学会誌と紀要はそれぞれに役割があるが、相互に連携しながら、看護実践研究の意義や特性を社会に示し、看護学の知の集積・深化に貢献したいと考える。

小林（2014）は、紀要は各自の教育・研究成果の発表の場としてだけでなく、どのような教育・研究に取り組んでいるかがその組織内で互いに知り合える場、交流・共同の芽が身近に生まれ易くなる場、かつ外部からはその組織が全体としてどのような活性度、研究状況をもっているかその一端を把握できる場としても機能していると述べている。大学教員一人ひとりの成長、また大学組織としての成長に、紀要は少なからず役割を果たしていると考え。今後は、社会の変化を見据えつつ、本学紀要の特徴を活かして成長の機会として活用できる紀要のあり方を考えていく必要があると考える。

文献

小林 侑二．（2014）．紀要についての一考．東北大学医学部保健学科紀要，23(2)，47-51．